
名探偵ホームズと「生来性犯罪者」

—変質論の系譜と推理小説への展開

宮崎かすみ

—要旨

本稿では、変質論と推理小説の親和性を論証した。まず19世紀半ばにフランスで精神医学の理論として発表された変質論がもっと前の時代の、人類学における人種論としての議論にまで遡り系譜をたどった。その上で、ロンプローズの犯罪人類学の理論的骨格となっている変質論が、人種論に由来するものであることを明らかにした。後者の変質論は、ダーウィニズムの影響が色濃く、退化や先祖がえりといった概念を特徴とするが、アーサー・コナン・ドイルのホームズ・シリーズを、この変質論のパラダイムから読み解いた。そして、ホームズ物語は、犯罪という現象の原因にある政治や社会問題を、犯罪者の変質した身体の問題へと収斂させるというプロットを内在させていったことを指摘した上で、そのベクトルを変質論から援用していたという結論に至った。

はじめに

イギリスで最初の推理小説と言われるウィルキー・コリンズの *The Moonstone* が書かれたのは1868年のことである。この作品には当時最先端の医学・生理学知識がふんだんに盛り込まれていただけでなく、推理プロットの根幹がこうした医学知識によって組み立てられていた。本稿では、当時の医学知識のなかでも、精神医学の理論として登場し、19世紀末にかけてヨーロッパの思想史を席卷した変質論という思潮と推理小説との関わりを考察する。『月長石』に取り入れられた変質論がイギリスの医学界に入ってきたのは1850年代後半のことで、『月長石』が書かれた60年代にはダーウィンやスペンサーの進化論との関わりから雑誌に取り上げられるようになっていた。19世紀半ばに誕生した推理小説は、ある意味で変質論的な環境に着床したと言えよう。その後、変質論と推理小説との蜜月関係をさらに深めたのは、アーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズである。医者でもあったドイルは、当然のことながら医学的知識に精通していた。19世紀のイギリス推理小説は変質論との提携の中から生まれて発展したと言っても過言ではない状況があったのである。それではなぜ、このような蜜月関係が成立したのか。

近代の国民国家は国境という境界線をつくり、その外にいる者を国民の敵として措定す

ることで境界線内部の国民を統合した。その一方で、境界線の内部にも「内なる敵」を炙り出すことで社会の結束を維持しようとした。「内なる敵」とは、外見から判別可能な人種的な他者とは異なる、「見えない他者」のことである。変質論とは、まさにこの他者を社会の中に創り出すための文化装置であった。そして国民国家の中の「見えない他者」であり、かつ「内なる敵」とは、変質した者たちのことだった。変質論は、市民階級にとって脅威となる者たちを病者として囲い込み、彼らの存在の意味を医学的に説明した。さらに誰が他者であるかを医学的に特定し、「変質した人々」の定義や分類を詳細に提供しもした。つまり「見えない他者」を目に見えるようにしたのである。

この、「見えない他者」を目に見えるようにするという、変質論と同じ機能を果たしていたのが、ドイルが生んだ名探偵シャーロック・ホームズである。医者という専門家集団が社会に潜む「見えない敵」である変質者を炙り出すのにさまざまな変質の「徴候」とされるものを考案したのと同じように、ホームズは一般の人々には見えない微細な「徴候」を、彼の象徴的持ち物として名高い拡大鏡で、あるいは透徹した眼力でもって見通した上で、得意の演繹的推理力でもって犯人を特定した。医者でもあったコナン・ドイルが着想したホームズという探偵は、市民階級から逸脱した「他者」を炙り出す変質論の役割を小説という市民的想像力を掻き立てる文化装置のなかで担っていたといえる。

本稿では、変質論と推理小説が、犯罪者の身体を他者化するという機能において通底していたという仮説のもとに、変質論の思想を概観したのち、ホームズ物語の分析を通して、変質論の発想がいかに関与したかを分析してゆく。この時代に法医学が発達して犯罪が体系的に医学化されてゆくなか、推理小説において探偵は診断の名医として描かれるようになっていく。医者としての探偵が読むのは犯罪者の身体であり、ここでは社会や政治の問題がすべて犯罪者の身体の問題へと還元されてゆくのだ。本稿では、推理小説がそうしたベクトルを変質論の言説から汲みだしていたことを明らかにしてゆく。

変質論とホームズ・シリーズにおける推理との相関性を考察する前に、とりあえず、変質論の概略について、少し踏み込んで整理しておきたい。

1. 変質論とは何か

変質論は、思想と言うにはあまりに錯綜し、無定型である。むしろ人類進化や文明の進歩といった問題に比喩を提供した言説体系だったと理解するのが妥当なところだろう。古典古代からヨーロッパにあった堕落・衰退・頹廢といった概念が、19世紀の後半に至って、精神医学、人類学、性科学、犯罪学などの諸学問の言説の中に取り込まれ、「変質」(degeneration)という特殊に社会・生物学的用語で捉えられたのである。つまり変質論とは、一言で言えば、これらの諸学問を動員した「逸脱の医学的モデル」⁽¹⁾だった。精神医学の遺伝説、人類学のハイブリッド論、ラマルクの獲得形質の遺伝説などを吸収しつつ、社会文化的進化論と共振してポスト・ダーウィニズム時代の重要な神話、進化の反対の退化のイメ

ージを提供した。またこれは中流階級のリスペクタビリティから逸脱する社会に不穏な分子を、相互に関連づけ、それらを同一の原因から引き起こされた様々な症候であるとするネットワークを創りあげた。さらに中流階級にとって脅威となる人々を遺伝現象によって社会を汚染する者として病理化した。

ダーウィン以後のヨーロッパの精神世界を席卷していたこの神話は、『旧約聖書』中のアダムの墮落神話に見られるように、古典古代にまで遡ることのできる根の深い、しかも広範な広がりを持つ伝統思想である。変質という考え方の基本はあまりにも深くヨーロッパの精神史に根付いているためにそれを解きほぐすことは筆者の力量をはるかに超える。取りあえず本稿で確認できるのは、変質ないしは墮落という考え方は、聖書の歴史観、あるいは時の経緯についての基本的発想に由来するということである。キリスト教は、人類はよりよい状態に進歩しているのではなく、神が創り給うた原初の状態が最高で、代を重ねるにつれてそこから遠ざかり徐々に墮落していくと考える。まさにこの思考法が変質論の本質である⁽²⁾。また、聖書が語る様々な人種の起源は、ノアの子孫が各地へ移住し、本来生まれ落ちたのではない土地の新たな気候風土の下、神への信仰から離れて暮らすうちに体質が変質し、墮落したために生じたものとされていた。これは環境適応によるより低い段階への墮落・変質説の原型である。さらに言えば、この‘degeneration’という語は、発生を意味する‘generation’の反意語として、生命が発生した後に、成長し完成へと向かうプロセスの反対をなすものを指してもいる。医学の発達していなかった時代、あるいはそれ以降でも社会の下層の人々にとっては、生きることとは墮落・変質する過程に他ならなかった。ちなみに、19世紀末に性科学者のハヴロック・エリスは、成人よりも、より発生に近い段階、特に胎児の段階こそより進化した段階であるとするネオテニー（幼形成熟）説を唱えた、この考えによれば、人間にとって「成長するということは、約3歳以降はいくらかは、変質と老化の途を進むことである」⁽³⁾と断言している。変質と墮落とは、生きることそのものに潜む本質的プロセスでもある。

フーコーは狂気、犯罪、セクシュアリティといったものの近代的編制を類まれな詳細さと執拗さでもって浩瀚^{こうかん}に描き出した。これらのものが近代の規範化を志向する権力の対象となるプロセスが、実は変質論の展開そのものであった。近代的権力が狂人、犯罪人、非行少年、異性を愛さない者たち等をヨーロッパ内部の一つの新たな種族（race）として産出し、編制し、ヨーロッパ内部の異人種として「植民地的に支配」⁽⁴⁾するに至る歴史とメカニズムをフーコーは解き明かした。だが、彼の関心は、変質という比喩体系が担った社会の不安や危機を豊かに表象した仔細な表現よりも、医師や科学者が変質論を利用して権力を行使した戦略や、権力のあり方そのものの方にあるらしく、フーコーの変質論は抽象化されている⁽⁵⁾。

そのせいか、変質論がフーコーの歴史研究を動機付けているということにはあまり関心が払われてこなかった⁽⁶⁾。アメリカにおける「生来性犯罪者」の事例を通して同じ事象を取り上げたニコル・ラフターは、この現象のうちの犯罪に関わる分野を独自に「優生学

的犯罪学」(eugenic criminology)と呼び、これが1875年から1920年代にかけて「広範に流布した、社会問題の遺伝的解釈現象」⁽⁷⁾の一部であったとする。彼女によれば、犯罪を生物学的に解釈する理論の展開を扱った先行研究の殆どは、その背後に広く浸透していた「優生学的犯罪学」の一般現象に気づいていない⁽⁸⁾。この指摘にあるように、当時の殆どすべての思考には「社会問題の遺伝的解釈現象」が潜み、人々の思考のことごとくに影を落としていた。そしてまさにラフターが言うところの、社会問題を身体や遺伝の問題へすり替えるのを可能にした比喻を提供したのが「変質論」という言説体系であった。

しかしながら、ヨーロッパ精神史をもっと大きなスパンで見ると、変質あるいは墮落という概念は、「社会問題の遺伝的解釈現象」などという特殊で一時的な問題には到底納まらない。例えば「創世記」において、神を怒らせ洪水を引き起こさせる原因となった民の「墮落」、ギボンが『ローマ帝国衰亡史』を書いた時の「衰亡」という観念、世紀末、ユイスマンス描くところの『さかしま』中のデ・ゼッサントに代表される唯美主義者たちの「退廃」、ロンブローゾ博士の唱える未開人や動物に近いという「生来性犯罪者」の「先祖返り」、さらには『ドラキュラ』中でジョナサン・ハーカーがトランシルヴァニアで目撃した「甲状腺を腫らした」チェコ人やスロヴァキア人達(ドラキュラ伯爵自身は言うまでもない)、ダーバヴィル家の末裔たるテスに向けてエンジェル・クレアが言い放った「君は衰退した一族の晩生の芽生え」という言葉、これらすべてが「変質」の文脈の中で理解されていた。ヨーロッパの精神において、「変質」は「進歩」の反対概念として実に広範な意味を汲み、かつ生産し続けていたのである。とりわけ、ダーウィン進化論がある程度の浸透を見た後、その反対概念としての変質・退化がにわかに脚光を浴びたことから、文化現象としての変質論はヨーロッパの世紀末に大きなブームを迎えた。1892年のマックス・ノルダウによる『変質論』(*Entartung*)の刊行は、この文化現象を象徴する出来事であった⁽⁹⁾。

2. 精神医学における変質論

世紀末の変質論ブームの、とりあえずの源泉となったのは19世紀半ばのフランスで発想された精神医学の学説であった。フランスではラマルクの獲得形質の遺伝説が根強く支持されていたが、これは環境の変化によって余儀なくされる生体の適応を、生体が環境と自らとの間に均衡をもたらそうと新たな行動や形質を獲得し、それが次世代の子孫に遺伝的に伝えられるような有機的秩序(organic economy)を生体内部に持つ、という考え方である。変質論は、この思考の中から生まれた。環境の変化が、長期的には悪しき影響を及ぼすようなものであった場合、どうなるのか。この間に対して解答を試みたのが、ベネディクト・モレルである。彼の著作、『人類種における身体的、精神的および道徳的変質の特徴』(*Traité des dégénérescences physiques, intellectuelles et morales de l'espèce humaine*, 1857)が、精神医学の変質論の嚆矢と見なされている。モレルの言う変質とは、病を引き起こすような悪しき

環境に適応した個体が「素質」とか「傾向」としてこの病理を潜ませながら、後の世代になって病的なタイプの身体的神経的失調の進行として発現するようになることだった。これを一言で言うならば、人類種の正常型 (le type normal de l'humanité) からの病的な逸脱であって、この作用は遺伝によって進行的に次世代に伝わってゆく。本来の種の原型から墮落してゆくという発想自体、聖書の創世記神話に基づいており、キリスト教の宗教観・罪意識といったものの枠内で発想された考えであった。モレルによれば、過度の飲酒、不道德、貧しい食生活、不健康な室内および危険な職場環境といった大都市の劣悪な環境、人体に有害な土壌成分を含む土地や瘴気に満ちた沼沢地等人体に悪影響を及ぼすとされていた環境、あるいは大麻や薬物、アルコール等の中毒、劣化した穀物の摂取といった状況の中で身体が疲弊・衰弱し、それが病的な諸症状を引き起こす。それが遺伝によって次世代に虚弱な体質として伝わり、ヒステリー、アルコール中毒、結核、るいれき、身体的不具などの様々な症状を引き起こすとされる。モレルの主張する変質という遺伝説の新しい点は、遺伝によって一つの疾病のみならず、ある体質全般が伝わるという考えである⁽¹⁰⁾。モレルによれば、まず神経細胞が刺激に対して常に病的に反応してしまうような生体の状態が生じ、そのために過度に疲労・消耗して生体の衰弱を招き、様々な疾患として現れる。こうした体質が何代もの遺伝によって伝わると、遺伝的に汚染された係累をなし、世代が下るにつれて汚染が蓄積されて次第に強く現れるようになる。生殖が4、5代も続くと生殖力が衰え、完全な痴呆化、生殖不能を経て死に至るとした。

この説によってモレルは遺伝という現象が語られる文脈を一変させた。これまでの理解では遺伝はあくまでも個人の患者の体質だけに影響を与えるものとされていたが、変質論の登場によって遺伝は有機体としての社会全体の健康を損なうこともあるとされ、より重大な意味を帯びることになった。社会は一種の身体であり、相互に連関して機能していると理解されるようになると、社会という有機的の身体に病んだ成員がいれば社会全体が汚染されることになる。モレル自身の考えでは、変質した一族はじきに生殖力が衰え、死に絶えるであろうから、彼らが増殖することを心配する必要はなかった。しかしその後継者たちは、変質した女性たち (娼婦や精神遅滞者) の旺盛な性欲と生殖力を懸念し、中流階級が貧しい変質した階級に凌駕されてしまうのではないかとこの恐怖を煽るようになった。汚染された危険な遺伝子を持つ人々が社会全体を脅かすのではないかと。こうした危惧は1870年代以降、優生学運動へと収斂されていくことになる。モレルの変質論は、前の時代からあった都市の下層階級の変質とか衰退という表現から一步抜け出て、自己増殖的な社会の病的プロセスを指すようになったと言える⁽¹¹⁾。

精神医学において精神病の原因を脳細胞の微細な病変に求めたのは、モレルが最初であった。その意味では、1860年代まで主流であった、ピネルやエスキロールらのように狂気の外的症候の観察に重きをおく手法とは袂を分かった。そのモレルさえも、変質による精神病の可視的な徴候の可能性を信じ、外見的指標のリストの作成にいそしんだ。顔の非対称、頭蓋骨の奇形、斜視、神経質な動作、麻痺、チックなどが変質の症候で、これらは

脳や神経における変質が身体の表面に表れた「烙印」であると提唱された。変質を外から見分けたいという欲望に抗しきれなかったのである。だが、変質の可視性は、観相学や骨相学で言われているほど単純な問題ではなかった。モレルはこれらの可視的特徴を「身体の烙印」として提示はしたが、同時に病理の根源は眼に見えない内部にこそ潜むものであることを強調していた⁽¹²⁾。「変質」した神経細胞は脳の奥深くに潜み、眼には見えない。表面から見えない内部の異変や病変が、人知れず進行して生体を蝕んでゆく。モレルが提示した変質の不可視性は、表面と内部の乖離、つまり表象に対する不信を生起させた。近代初頭までは「存在の大いなる連鎖」という世界観の下、世界の事物は、神の意志が表されている外見によって秩序付けられており、事物の外見には神の恩寵がそのまま反映していると信じられていた。しかし、こうした外見と内部の本質が相応しているとする表象へのナイーブな信奉もついにその足元が揺らぎはじめた。モレルの説は、物事が眼に見える通りではないのではないかという表象に対する不信を呼び覚ましたのである。変質論には「奥義と神秘、本質的な不可視性の感覚」⁽¹³⁾がつき纏っていたが、それは、当時発展しつつあった都市に住む、無数の顔なき群衆の中に紛れ込んでいるかもしれない、不可視であるがゆえに一層危険な他者（=犯罪者）への不安と恐怖の念とも共振していた。

こうした心情の背景にあるのは、19世紀以来の文明化の進展と、その一方の都市の生活環境の劣悪さである。これほどの文明化を達成したにもかかわらず、相も変わらず存在する獣のように生きる都市の貧民、彼らの置かれた劣悪な環境、犯罪や自殺の増加、高い死亡率、生活の悪弊、精神の病理等々。こうした事どもは当時の人々にとって文明化のパラドクスと痛感されずにはいられなかった。変質とは、その意味では文明とその申し子の都市の病であった⁽¹⁴⁾。

3. 人類学における変質論

モレルの唱えた変質論は、瞬く間にフランスの精神医学界を席卷した。その要因として一つには、モレルが採用した遺伝による説明が、それまでの狂気を魂の問題と関連づけて理解するようなキリスト教的理解からの脱却を可能にしたことがある。さらに、人種論を援用したことも大きかった。本来、聖書の人種論であった変質という考え方は、人種の理論として、植民地「原住民」や異人種の状態を理解するのに使われていた。じつはモレルが精神医学に転用する一世紀も前から、変質論は人類学の最重要なトピックであった。この分野で変質論を最初に唱えたのは、フランスの18世紀の博物学者、ジョルジュ・ビュフォンである。彼は、起源において一つだった人間にいくつかの人種が存在するのは、本来生まれ落ちた土地から移動して、気候風土の異なる離れた場所で暮らすうちに環境適応して変化した結果であるとして、聖書の人種論を発展させた。神が作った原人間としてのアダムとイブは白人だったから、黒色人種や黄色人種はこのメカニズムによって変質したものだとして説明された⁽¹⁵⁾。

しかるに、人類学には変質論にもう一つの系譜があった。19世紀の科学的人種論者にとって最も重要な問題は、異人種間で交配が可能か否かということであった。キリスト教神学では、種とは神が造ったもので不変であるとされていたから、種の壁を超える異種間交雑には強い抵抗があった。人種の起源が複数であるとする多源主義者は19世紀半ば以降に勢いを増しつつあった。というのも彼らには異人種間交雑は受け入れがたいものだったからである。そうは言っても西インド諸島などでは白人と「原住民」との混交が進み、実際に子供が生まれているという否定できない事実があった。そこでスコットランドの解剖学者、ロバート・ノックスは、異人種間で交雑は可能であっても、活力のない子供が生まれてくる、つまり変質してしまうのだと説いた⁽¹⁶⁾。そして何代かの交雑を経ると、子孫は本来の種のどれかに「先祖返り」してしまうのだと説明した。こうして、異人種間交雑を嫌悪する社会の要請に合致した、異人種間交雑の結果の「変質」という概念が提唱された。ここに「変質」を「先祖返り」と結びつける発想が生まれ、その後人類学における「変質」と言えば、人種交雑の結果の「変質」を意味するようになる。そしてこの人類学の「変質」は、ダーウィンの進化論によってさまざまな人種が進化という時間軸に沿って一元的に配置されるようになるや、「先祖返り」という意味を持つようになった。かくして、「進化」の対概念としての「退化」という意味での「変質」が地歩を得たのである。この人類学の「変質」は、ビュフォンの環境適応説の系譜にあるモレルの変質論とは本質的に異なっていることを確認しておきたい。

4. 犯罪人類学への展開

イタリアのチェーザレ・ロンブローゾは先祖返り説にもとづき、ヨーロッパの犯罪者のなかには隔世遺伝的に何代も前の祖先に先祖返りして、文明社会の道徳心や責任感を持ち合わせていないために犯罪を犯す宿命にある人々がいるとした。そうした人々を「生来性犯罪者」と名付け、人種に準じるものとする概念を提唱した。さらに彼は、犯罪者だけでなく娼婦や後には同性愛者も、隔世遺伝によって当代のヨーロッパ人よりも何世代も前の未開・野蛮な状態に先祖返りしているがゆえにそうした行動に走るのだと説明した。コナン・ドイルがホームズ物語に採用した変質論は、ロンブローゾ由来のこちらの説なので、以下でこの説を少し丁寧を追ってゆきたい。

ロンブローゾを輩出したイタリアが近代的な国民国家として統一を果たし、ヨーロッパ列強の一角に名乗りを上げたのは1861年のことであり、出遅れ感の否めないスタートであった。この国家統一は、アルプス山麓出身のサヴォイア家によって成し遂げられたが、南北に細長く広がり地方的特性に富む国土の統一は難航し、統一後もいくつかの難題を抱えていた。国民国家の編成原理は、均質かつ一定レベル以上の国民を前提とするが、イタリア王国ではその地理的特性からして、均質な国民を求めるのは困難なことであった。ロンブローゾの犯罪人類学成立の背景には、偏差が大きく人種的にも多様な住民を、均質な

国民として一括りにしなければならないという政治的事情があった。このことは地域差を重んじ、地域の特性ごとに記述する彼の叙述のスタイルによく現れている。犯罪人類学を立ち上げる以前、ロンブローゾはイタリア人の人種的多様性を調べる人類学調査に携わっていたが、彼の頭蓋計測を用いる方法や変質の可視性への信奉は、こうした人類学的調査のスキルをいくらか反映していると考えられる。ラマルク主義が根強かったフランスとは対照的に、イタリアではダーウィニズムが広まっていたために、ロンブローゾはモレルの変質論ではなく、人類学由来の変質概念である先祖返りや進化の反対の「退化」という概念を採用している。独自の主張である「生来性犯罪者」の隔世遺伝説もダーウィニズムの影響下で発想された。ロンブローゾはイタリアの政治的後進性という問題を克服するために、進化論的生物学と形質人類学を動員したのである⁽¹⁷⁾。

ロンブローゾが統一前後のイタリアという国土に散らばる「国民」の身体に見たものは、そこに刻みつけられた進化の歴史のプロセスであり、彼はその歴史を現在の時空にもってきて地理的・水平的に配置し直すことができると考えた。「暗黒大陸」に比されていた南部の未開な農村地帯に住む農民たちの身体には「遺伝的に受け継がれてきた後進性の諸特徴」⁽¹⁸⁾が記されており、それは彼の眼には「国家を蝕む隔世遺伝の重荷」と映った。リソルジメント後のイタリアにとって喫緊の課題は、政治的形式だけではない真の国家統一であり、真正のイタリア国民を創造することだった。生まれたばかりの不安定な国家を揺るがしかねない敵の中でも、最も恐るべきは「犯罪者階級」だった。イタリアを後進性から脱却せしめ進化の王道に乗せるためには、「退化・変質した国家のお荷物」⁽¹⁹⁾が進化の道筋を妨害しないよう市民階級の外部へ囲い込まなければならない。「ロンブローゾの犯罪人類学は国家の脅威を科学的に理解し、その上で政治的に排除するという形で、国家が自らの内に彼らを抱え込む助けとなろうとしていた」⁽²⁰⁾のである。

ロンブローゾは1876年に『犯罪的人間』(*L'uomo delinquente*)を刊行し、ある種の犯罪者は隔世遺伝の結果生じた、人類の下等な段階の甦りであるという説を発表した。この考えを「単なる考えではなく啓示である」⁽²¹⁾と彼は称しているが、それは悪名高い山賊のヴィレラの頭蓋骨にある特徴が下等な脊椎動物のそれに類似していることを発見した時に「突然、燃えさかる空の下に照らし出された大地のように、犯罪者の性質の問題」の解決が閃いたのだという。つまり「彼らが原始的な人類や下等な動物の残忍な本性をその身体の内再生させた隔世遺伝の産物である」と。彼は変質を表す身体的特徴—烙印—の目録を作り、それをもとに「生来性犯罪者タイプ」を抽出することにこだわり続けた。罪を犯すよう宿命付けられている人々を、犯行に及ぶ前に識別して隔離することができるように、身体に刻印された退化・変質の徴を読み取る手掛かりを与えることが犯罪人類学の使命であると考えたのである。ロンブローゾは、退化・変質が外から識別可能なものと認識していた点で、人類学の系譜に属していることがわかる。モレルは、先述したように、変質の可視性を否定していたから、頭蓋骨の形状などによって変質を判断することを度々戒めていた。「(変質に)特徴的な要素は外見上の相違のみを根拠とするのではなく、神経組織や感

覚器官の発達の度合いに由来する内部の相違にも拠るのである」⁽²²⁾。モレルを始めとするフランスの変質論者は変質を内部の、目に見えない秘密の場所に潜む病理であるという見解に固執していた。それに対してロンブローゾは観相学・骨相学のような擬似科学的知識に基づき、退化の徴たる「烙印」にこだわった。この信念の下に彼は、獣性や下等な人類の徴候が刻印されるとされる犯罪者の顔写真を蒐集したのである(図1)。



図1 ロンブローゾが蒐集した犯罪者の顔写真
出典； Cesare Lombroso, *L'uomo delinquente*.

ロンブローゾの人類学由来のもう一つの特徴は、彼が「生来性犯罪者」を識別するために駆使した頭蓋計測の方法である。彼がこうした手法を採用した素地にあったのは、先にも指摘した、60年代に従事した兵士の人類学的調査である。ロンブローゾの学問をイギリスに紹介したのは、彼の『犯罪者論』を英訳(1891)し、また犯罪人類学の成果の紹介書、*The Criminal* (1890)を書いたハヴロック・エリスである。エリスはロンブローゾを引用しながら次のように要約している。「一般的に言って生まれながらの犯罪者は突出した耳、多毛、薄い髭、前額部の突出、大きな下顎、角張っていて飛び出した顎、大きな頬骨、落ち着きのない身振り等を有しており、つまり、モンゴロイド、および時にネグロイドに似ているタイプの人々なのである」⁽²³⁾。エリスにとって犯罪者とは、「発達上の何らかの偶然や、遺伝・出生・鍛錬の何らかの欠陥によって、その者が現に今生きている社会よりも、もっと下等な、もしくはより古い時代の社会状態に本来帰属する」人達である。彼らは時間軸においてはるか昔の原始時代に、地理的には東洋やアフリカなどの植民地に本来帰属しているというのだ。

ロンブローゾにしるエリスにしる、彼らの関心が原始時代の「野蛮人」や植民地の「原住民」でないのは明らかである。進化の時間軸において彼らに匹敵する犯罪者が、文明のお膝元、ヨーロッパの内部にさえいるということ、つまりヨーロッパ内部に棲息する「野蛮人」や「原住民」に相当する変質・退化した者らこそが問題なのである。ここに変質論の本質的な構造が現れている。変質論とは、ヨーロッパ内部の内なる「他者」を浮かび上がらせ、彼らが「他者」たる所以を説明する言説を提供する言語表現の貯蔵庫のようなものであった。ヨーロッパの内部、文明社会の内部にさえ依然として存在する、動物や「未開人」のように貧しく不潔な生活を送る都市の貧民や犯罪者、辺鄙な田舎で先史時代の穴居人のように暮らす貧農や、獣のような性欲を持つ性的倒錯者等を目の当たりにして、しかも彼らを国民として近代国家へ統合しなければならなかった過程において、彼らの存在に合理的説明を与え、新たに統合された国家のどこに位置づけるかという問題への処方を提供したのが、変質論だったのである。

19世紀末にかけて、凶悪犯罪の増加、同性愛者の存在、「新しい女」の台頭、ボーア戦

争期に取りざたされた帝国兵士としての身体の適性の問題等、いわゆる世紀末的不安と言われる感情が世を覆うようになると、中流階級にとって制御不可能なエネルギーに対する不安や恐怖、罪悪感を置換あるいは転移するための言説として変質論に期待される役割は大きくなっていった。変質論は、リスペクタブルな中流階級が逸脱者・病者・倒錯者に対する彼らの敵意を正当化し、彼らに対する言いようのない恐怖や不安を言語化した。変質論が提供したのは、犯罪者や売春婦等を、規範的中流階級からの逸脱として定義づけるための差異化やカテゴリー化の言説だった。近代の規範的な権力が、支配の対象を禁止・抑圧するだけでなく、カテゴリーや差異を積極的に創出することによって差別化し、支配したというのは、フーコーが分析した権力の様態である。

変質論という言説が結晶化していたのは、文明社会が衰退することへの危惧であった。この説が着床したのはフランス革命以降の政治的混乱の中であったが、これは哲学や政治思想、経済に関わる領域よりもむしろ、医学・生理学・人類学・進化論的生物学を席卷することとなった。それが問題にするのは何よりもまず個人の身体であった。ダーウィニズム以降、これまでにない強い力で社会と身体と再生産（生殖）が結び付けられることになった。身体はいまや身体そのものにとどまらず、種族の命運がかかった再生産のための神殿となる。変質論が生み出した言説の特徴は、経済や社会の進歩の問題が身体の再生産という進化の問題にすり替えられたことである。科学者たちの視線は身体の表面に集中した。この傾向を最も顕著に代表していたのがロンブローゾだった。この同じ関心から、彼はうそ発見器も発明した⁽²⁴⁾。自らの意志に反して身体が真実を告げる。この意味で、うそ発見器はこの時代に、身体が精神に対して新たに獲得しつつあった意味を象徴しているかもしれない。精神を裏切ってでも真実を語る身体。身体は、キリスト教の心身二元論の教義によって押し込められていた劣等的地位から解放され、精神を脅かしつつあったのである。

それでは次に、変質論がホームズ物語でどのように織り込まれているのか、以下で具体的に検討してゆきたい。

5. ホームズ物語と変質論

エリスが *The Criminal* の序文で、イギリスは他の国々に比べてロンブローゾの学問が広まっていないと嘆く3年前の1887年にホームズ物語が誕生した。変質論パラダイムに則った一連のホームズ・シリーズが博した大衆的な人気を考えると、エリスが嘆くには及ばなかったかもしれない。ドイルが影響を受けたのは、ロンブローゾに由来する変質論および「生来性犯罪者」説である。このパラダイムの影響下にあるということは、犯人は外から識別可能な犯罪者の徴を帯びているということだ。ドイルは、アイルランド国立美術館長を務めたヘンリー、『パンチ』の挿絵画家として活躍していたリチャード・ドイルらを伯父に持ち、父も素人ながら絵心があるという美術の素養が豊かな環境に育った。そのせいか彼の文章は絵画を意識してきわめて描写的であるが、そうした文章で犯罪者を表現され

れば、読者はすぐに犯人が誰であるかわかってしまう。だからホームズものの基本プロットは、犯人探しのおもしろさ、意外性にあるのではなく、むしろ細部や部分から全体像を再構成する時の、無数にある細部の内のどれかが突然重要な意味を帯びはじめる瞬間の驚き、および、それらに一貫性を与えるストーリーの意外性に拠っているといえよう。ホームズものにおいて犯人がいかに規範から逸脱した特異な容貌をもつかを示すには、「ブラック・ピーター」(‘The Adventure of Black Peter’, 1904) の次の一例をあげれば十分であろう。犯人をおびき寄せるために、下手人と同じ P.C. という頭文字の銚打ちを募集したところ応募してきた三人の容貌の描写である。

最初に入ってきたのは、血色のいい頬にやわらかな白い頬髯をはやした、リヴストンのリンゴのような風貌の男だった。(中略)

次に入ってきたのは、背の高い無愛想な男で、血色のわるい顔に髪の毛が細くてすなおだった。名をヒュウ・パティンズといった。この男も採用にはならず、足代の半ソブリンをもらって待たされることとあいなった。

三番目の男は、異様な風貌を備えていた。頭髮も顎鬚ももじゃもじゃに乱れたなかから、ブルドッグのような烈しい顔をのぞかせ、房のように垂れた太い眉毛の下から大胆な眼光がきらめいている。⁽²⁵⁾

この一節を読んだだけで、三番目の男が犯人であることは一目瞭然だ。ホームズは最初の二人を一目見ただけで不採用にし、三人目は入ってきたときから探していた人物であることを見抜いた。このように、犯人が並外れた容貌をもち、ただならぬ雰囲気を漂わせているという例は枚挙に暇がない。だから読者は奇想天外な犯人捜しの面白さをホームズものに期待することはできない。

次に変質論プロットが物語そのものの構造となっている例として、『バスカーヴィル家の犬』(The Hound of the Baskervilles, 1902) を分析対象としたい。作品の冒頭に登場するモーティマー博士の存在によって、我々はこの話に変質論パラダイムに則っていることは容易に読み取れる。まず博士の書いた論文のタイトルにしてからが、「疾病は先祖返りか」「隔世遺伝による奇形」「人類は進化するのか」と、ダーウィニズムとロンブローズの用語の羅列である。そしてこの博士はホームズに初めて会うなり頭蓋骨の形に目を止め、こう言う。「あなたのように長頭で上眼窩が著しく発達した例は知りません。失礼ですが、ちょっと頭頂骨にさわらせていただけないでしょうか。」⁽²⁶⁾ つまり、ロンブローズ的な用語で言うならば、ホームズのような頭蓋骨の形は、知能の高い天才性を表しているというのである。ちなみに変質論の文脈では、天才も変質の一つであり、知的障害や犯罪者とは反対に向けた標準からの変異の一つとされていた。変質論とは、犯罪者のような社会に害悪をもたらす人々のみならず、社会の平均から大きく突出して逸脱した人間すべてをひっくるめた「差異の記号」の体系であったのだ。ホームズやモリアティ教授の人物像はロンブローズの天才論⁽²⁷⁾

に依拠していると思われる。この作品でも変質した犯罪者として二種類のタイプが登場する。知能が高い犯罪者タイプのステイプルトンと、先祖返りタイプの脱獄囚セルデンである。

セルデンは凶悪な殺人犯だが、彼の変質は、ステイプルトンよりも遥かに時代を遡り、下等な動物や先史時代の穴居人に先祖返りしたという設定である。それをドイルがどう描写しているか見てみよう。

ろうそくを置いた岩の割れ目の上に、邪悪な黄色い顔がぬっと突き出てきた。それは、下劣な欲望が満面に刻みつけられた恐ろしい獣のような顔だった。泥にまみれ、髭も髪ものび放題のもじゃもじゃで、丘の中腹の石室に住んでいたという太古の野蛮人のようだった。⁽²⁸⁾

舞台となるダートムーアの湿原には、旧石器時代の穴居居住居跡が点在するとされる。いかにもその住居にでも住んでいたような「太古の野蛮人」に比され、動物的痕跡を色濃くとどめていた時代にまで遡る獣人のように描かれている。だが、恐ろし気な外見の割には、セルデンは大きな脅威とはならない。彼は、先の「黒ピーター」のケアンズという船乗りのような「見える変質者」なので、社会は簡単に彼を警戒し隔離することができるからだ。セルデンは、サー・ヘンリーから譲られた洋服を着ていたために、サー・ヘンリーの匂いを嗅ぎつけた魔犬に襲われて落命するのだが、これが結果的には、ステイプルトンの謀略から身代わりとしてサー・ヘンリーを守ることになった。

しかるに、ステイプルトンという得体のしれない昆虫収集家は、「見えない変質者」である。変質とは、なんらかの徴を身体に刻まれているとされる一方で、どこにでもいるのに姿は見えないという、遍在性と不可視性の記号を帯びてもいることはモレルが指摘していた。ロンブローゾの影響下にあるとはいえ、ドイルは高度に知的な犯罪者を、社会の内部に潜む見えない敵としてたやすく正体を現させない。ロンドンでヘンリー卿を尾行してい



図2 複数の犯罪者の顔写真からつくった合成写真
出典：Havelock Ellis,
The Criminal.

たステイプルトンを乗せた御者が、その人物の容貌を訊ねられ、「これと言って特徴のない顔をしている」⁽²⁹⁾と答えている。ワトソンは、初めて見たこの男の顔を次のように叙述している。「すらりとした小柄な男で、すましたような顔をきれいに剃り上げて、亜麻色の髪をして顎の細い、歳の頃3~40代、灰色の服を着て麦わら帽子をかぶっていた」⁽³⁰⁾。このとりたてて特徴のないすました顔とは、ゴルトンの合成写真に映っている幽霊のような顔なのかもしれない(図2)。ダーウィンの従弟で、指紋による人物同定法を確立したゴルトンは、ダーウィニズムと親和的な「生来性犯罪者」説を信奉していた。そして彼は、刑務所に収容されたいくつかのタイプを代表する犯罪者の顔写真を合成

して犯罪者を象徴する顔を抽出しようと努力した。

「ロンドン中のどこにでもいるというのに、誰も彼のことを聞いたこともない」⁽³¹⁾。これは最後の対決を覚悟したホームズが宿敵モリアティ教授を評した言葉である。天才的な頭脳の持ち主でその高度な知的能力をことごとく悪事に注ぐモリアティ教授は、神出鬼没でどこにでもいるにもかかわらず、痕跡を一切残さず人々の眼にとまることのない透明な存在である。その透明な隠れ蓑のお蔭で途轍もない悪事を遂行することができる。それはまた、有名な吸血鬼小説『ドラキュラ』(*Dracula*, 1897) 中で、イギリス上陸を目論むドラキュラ伯爵が、完璧な英語を身につけてイギリス人の中に紛れ込みイギリス人のように切りたい、つまり不可視のものになりたいという野望として表現されたのと同じものである。だからこそ変質は脅威だったのであり、ロンブローゾを烙印のリスト作りに駆り立てましたのである。

ハヴロック・エリスは罪を犯す要因として、社会的要因と生物的要因の二つをあげている⁽³²⁾。社会的要因とは、経済的な貧しさや悪しき社会環境等によって影響されて犯罪を犯す場合を指し、生物的要因というのは変質・退化のように、犯罪者の身体の生理や解剖学的特徴、心理的な性質によって犯罪を犯す場合を指す。社会的な要因は勿論重要であるが、まず生物的要因、つまり犯罪者の生理を知らなければ社会的要因に十分に対処することができないのだとして、エリスは専ら犯罪者の身体の生理に分け入る。「最後の事件」(*'The Final Problem'*, 1893) でモリアティとの対決を前にしたホームズも同様のことを言っている。「最近ぼくは、社会の欠陥が人為的に生み出す表面的な問題よりも、自然が提供する問題を研究したいと思うようになったんだ」⁽³³⁾。「自然が提供する問題」とは、変質、つまり先祖返りや隔世遺伝といった、生物学的要因という「自然」によって生み出された「生来性犯罪者」を指している。モリアティ教授は、「退化者」ではないが、自然の変異によって、高度な知能を持ちながら文明人の道徳心は備えずに生みだされた偏頗な「生来性犯罪者」であり、社会や人為によってつくられた犯罪者ではないという意味において、「自然が提供する問題」である。ホームズとモリアティの最後の対決の場が、峻厳なアルプス山中のライヘンバッハの滝という厳しい地理的環境に設定されていたこと自体に、モリアティとの対決の本質が「自然」との闘いであったことが表現されていただろう。

『バスカーヴィル家の犬』に戻り、ステイプルトンをこの視点から分析してみたい。この男がロンドンでホームズたちを尾行した時、御者にホームズの名を騙った。そのことからしてもこの男がホームズに比肩する存在であり、高度な知能を誇る犯罪者タイプに属することがわかる。ステイプルトンが自然の生み出した犯罪者だとすれば、この男が棲息し活動する自然、つまりグリーンペンの底なし沼とそれを取り巻く瘴気漂う異様な湿原という特殊なトポロジー自体が、ステイプルトンの本性(nature)の隠喩であることがわかる。この男は「自分よりも詳しい人間はまずいない」⁽³⁴⁾と豪語する程湿原に精通した案内者であり、底なし沼の奥にさえ自由に出入りできる唯一の人間である。そして沼の向こうには、他では絶滅してしまった珍しい種類の植物や蝶が棲息しているという。犬の咆哮のような

妙な鳴き声が聞こえた時、彼はワトソンにそれが、絶滅したと言われているサンカノゴイという鳥の最後の生き残りではないかと言う。絶滅しかかった種族の最後の生き残り。それは、ステイプルトン本人のことである。さらに、彼は底なし沼のことを、「足をとられるまで、地面と沼との区別がつかない」不吉な場所だと語る。「地面と沼との区別がつかない」、つまり危険なのか安全なのかわからない、ということだ。これも悪の本性をひた隠して善意の隣人を装い、悪人なのか善人なのかわからないステイプルトンの見かけと合致する。

この「底なし沼」がステイプルトンの象徴だとすれば、ステイプルトンの本質は底なしに深いということになる。この「深さ」とは沼の中に長年の間に堆積した泥の層の厚さを暗示する。さらにこの泥は腐敗して臭い瘴気を発する。そもそも沼沢地に立ちこめる腐敗性の瘴気には、人間を変質させる毒素が含まれていると考えられていた。ところでこの泥の堆積層の底なしの厚さとは、この一族の歴史の古さのメタファーでもある。蓄積されてたまる一方の泥とは、パスカーヴィル家の莫大な富と同じように、その長い歴史の間、遺伝によって子孫に伝えられてゆくうちに蓄積されて強まる一方の変質的病理を仄めかしている。古い歴史を誇る一族の名残で、高度な知的能力を持つ犯罪者の例として、他には「まだらの紐」(‘The Adventure of the Speckled Band’, 1892) のロイロット博士が挙げられる。一族の歴史が古ければ古いほど、病理の根も深い。

ところでステイプルトンがイングランド西南部で随一の^{りんしるい}鱗翅類のコレクションを誇る博物学者であり、家の中に立派な蝶や蛾の標本室を備えていたことにどのような意味があるのか。博物学者とは、生物を発見し、それがどの種類に属するか同定し分類する人のことだが、この行為は犯罪者を発見し、その身体を計測して、どの種類の犯罪者タイプに属するかを同定し分類する犯罪人類学者のそれに酷似している。モーティマー医師がホームズの頭蓋骨をほしがっていたように、彼らは頭蓋骨や脳髓等の解剖標本を誇らしげに収集していた。つまりステイプルトンが収集する昆虫の標本のように、ステイプルトン自身、犯罪学者たちにとっては標本とされるべき存在であり、彼らの研究や収集対象としてガラスケースに陳列されてもおかしくない人間だったということだ。彼の集める昆虫とは、学者に収集される自分自身の姿の裏返しなのである。

「高名な依頼人」(‘The Adventure of the Illustrious Client’, 1924) に登場するもう一人の知的犯罪者であるグルーナ男爵が蒐集するのははるかにすごいものだ。まずはほとんど唯一無二のレベルと数を誇る中国磁器のコレクション。警戒怠りないグルーナ男爵に近づき、本陣に入り込むための囮として、イギリス王室の所蔵とおぼしき明代の途方もない価値の磁器が使われた。磁器には眼のない男爵がその宝を一目見たいという誘惑に負け、ワトソンを家の中に通してしまったという曰くつきの逸品である。男爵のもう一つの究極のコレクションは、女性の写真である。彼は、自分が征服した女性の収集家であった。

この男はね、女を収集しているんですよ。そして自分のコレクションを誇りにしてい

るんだ。蛾や蝶を収集する連中のようにね。あいつは、それを全部あの手帳に集めていたんだよ。スナップ写真、名前、細々とした特徴、要するに女たちについての全てをさ。⁽³⁵⁾

この男のデータの整理の仕方は、人体測定法を開発したアルフォンス・ベルティヨンの手法によく似ている。パリ警察庁の役人だったベルティヨンは犯罪者を同定するために、身体の各部を計測したデータと、正面と側面から撮られた顔写真二枚と、「言葉による肖像」と呼ばれた記述説明を人体測定カードに記すというやり方で犯罪者識別技術を確立した。とはいえ、この方法があまり有効でなかったのは言うまでもない。人の顔を含めた容貌など、整形手術のない時代でも、時間の経過とともに容易に変わってしまうものだ。ベルティヨンの人体測定法は、じきにゴルトンが指紋による個人の同定法を発見するとすぐ取って代わられた。この作品が書かれた時点で、すでにゴルトンの指紋法は広まっていたが、グルーナ男爵は、女のコレクションという彼の言わば「情欲日記」⁽³⁶⁾の作成に当たって、パリ警察が誇る鑑識課長の手法にあやかっただのである。こう見ると、名うての犯罪者である男爵は、当の自分自身をつけ狙い、逮捕しようと手ぐすね引いている警察の身振りを奇妙な程に真似ている。つまり、博物学的分類・収集とは、近代において権力と能力を誇示し行使するもっとも一般的な行為であり、ステイプルトンといいグルーナといい彼ら収集家は、その閉じられた小宇宙に君臨する、知の専制君主なのである。収集家という特性は、警察権力に匹敵し対抗しうる能力と知性の象徴であり、犯罪者にして収集家でもある彼らは、高度な知性と底知れぬ奸智をあわせもつ、社会にとって最大級の脅威なのである。

これほどの難敵となれば、ホームズとてたやすく立ち向かえたわけではなかった。彼がステイプルトンの正体を見抜いたのは、バスカーヴィル家の食堂の壁に飾られた先祖代々の肖像画を見たときだった。ステイプルトンがこの一族の末裔であること、魔犬伝説の元凶となったヒューゴーへの先祖返りであることを突き止めたからだ。先祖の肖像画にその人に相通じる特徴を見出すというのは、モーズリーが挙げている例であるが⁽³⁷⁾ 同じプロットがハーディの『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'urbervilles*, 1891)において使われている。新婚の夜、テスから初めて過去を告白され、テスを受け容れられなくなったエンジェルが、滞在していた旧ダーバヴィル家の屋敷の階段の壁に懸けられていた気味の悪い先祖の肖像画にテスの面影を見出して慄然とする。この点において、ドイルの *The Hound of the Baskervilles* は、*Tess of the D'urbervilles* のパロディである。

しかし、ドイルはハーディの作品とは正反対のプロットを仕掛けた。テスは最後に情人のアレクを殺害し絞首刑に処される薄幸の女性だが、彼女が罪を犯したのは、貧しい境遇と過酷な運命の巡り合わせの故だった。エリスの分類でいけば、テスは機会性犯罪者であり、貧困や性道徳といった社会的・経済的要因によって罪を犯した「社会の犠牲者」である。夫のエンジェルはテスのことを、今は滅びた名門貴族の生き残りという血統を誉めそ

やしたり、あるいはそれ故に変質していると非難したりする。ダーバヴィル家が名門だとか、古い家柄の末裔は変質しているだとかと言い募り血統についての物語を紡ぐのは人間の仕業であり、それはテスという一個の人間にはまったくかわりのないことである。現に、テスの美点である美貌を与えてくれたのは彼女の母親であり、その一族はダーバヴィル家とは無縁の農民である。そして追っ手を逃れたテスは最後に、その母方の一族の起源の地にたどり着き、そこの異教徒の神殿であるストーンヘンジに横たわり束の間の安らぎを得た。このときのテスは異教の神への捧げものようだった。警察の追っ手が差し迫るなか、ほんのひと時、彼女は自分の真の起源の地において聖化された。それは、ダーバヴィルの血統が意味を失った一瞬でもあった。ハーディはこうして、衰亡したこの一族の血筋をテスの本質から切り離れた。ということは、変質のテーマは、この作品の表面をうろつき読者を惑わせはしたものの、テスが犯した犯罪とは無縁であったということである。

一方、『バスカーヴィル家の犬』は、自然のもたらした先祖返りという変異による変質の病理ゆえに罪を犯す者を主題とする。ハーディ作品が孕む社会的・経済的問題への批判が、そっくり身体の問題へ、自然の領域の問題へとすり替えられている。自然の生み出した犯罪者ステイプルトンとの最後の対決を邪魔するのは、霧という自然現象である。あと30分サー・ヘンリーが現れるのが遅かったら完全に失敗していただろうという程の濃い霧のため、サー・ヘンリーは、命こそ助かったもののステイプルトンが放った犬に襲われ、危うく命を失うところだった。霧という自然現象のために、そしてステイプルトンという自然の気まぐれが生んだ犯罪者のために、サー・ヘンリーの命は危機に瀕した。この事件は、勝ったとはいえ、薄氷を踏むような勝利だった。最終的にこの犯罪者を葬るのは、人間ホームズではなく、底なし沼という自然であった。自然の気まぐれによってこの世に先祖がえりとして生まれ落ちたステイプルトンは、底なし沼に呑み込まれるという形で、最後には彼を生んだ自然へと帰って行った。ことを起こしたのが先祖返りという自然現象であれば、決着をつけたのもまた自然なのである。

『四つの署名』(*The Sign of Four*, 1890)では、植民地「原住民」の残した、異常に小さな足跡をめぐって物語が進行した。この作品の真なるテーマは、植民地の搾取に対する植民地「原住民」からの報復の恐れであるはずなのだが、「未開人」の特殊な身体を見事に読み解くホームズの、冴え冴えしい推理によってその恐怖が覆い隠されてしまっている。つまり、帝国主義的支配に正当性があるのかないのかという政治的問題が、進化論的身体の問題にすり替えられているのである。そうすると、ホームズ物語とは、当時の人々の政治や経済、社会の状況に対する不満や不安、恐怖といったものを、権力に対する不満をガス抜きしながら、変質者の病理的身体の問題へと収斂させる役割を果たしていたことを確認できるのである。

終わりに一変質論パラダイムに対する批判的眼差しとその後の展開

このパラダイムは、しかしながら同時代人から既に批判されていた。例えばコンラッドは『密偵』(*The Secret Agent*, 1897)の中で、登場人物に「ロンブローゾなんて馬鹿だ」⁽³⁸⁾という台詞を吐かせている。ちなみにこの言葉を吐いたカール・ユントという男は'havelock'という軍帽から垂れた日除け布を肩にかけている。この語はハヴロック・エリス(Havelock Ellis)を連想させるが、エリスをモデルにしているらしいのは、ユントよりもロンブローゾ説の信奉者で、元医学生のオシポンという男である。

ホームズ物語に先んじるが、オスカー・ワイルドの「アーサー・サビル卿の犯罪」('Lord Arthur Saville's Crime', 1891)という短編では、手相占い師が、サビル卿の手相を見て、あなたは殺人を犯す運命にあると宣告する。不用意に殺人などを犯して世間のさらし者になるくらいなら自ら用意周到に犯して罪を逃れようと、サビル卿は、当の占い師を殺すことでその予言を成就するのだが、掌の線を見て殺人を犯す運命にあると告げるこの手相占い師は、ロンブローゾのパロディと読める。こんな戯言のような宿命論など聞き流せばいいものを、強迫観念となり、その言葉に支配されてしまったがゆえに、ロンブローゾのように失礼千万な手相占い師をテムズ川に投げて殺してしまうのだ。これは、奇妙奇天烈な宿命論を唱える変質論者たちに対する、ワイルド流の痛烈な意趣返しであろう。何しろワイルド自身も名だたる巨体の持ち主であり、ワイルドの性癖である同性愛は、当時性科学では変質に帰せられていたのだから。

毀誉褒貶のあったロンブローゾの犯罪人類学であるが、1890年代にはその権威もかなり凋落していた。精神医学における変質論自体も、1910年代にはクラフト=エビングらに見放され、第一次大戦後は一気に退潮に向かう。しかし表現を微妙に変えながら、このパラダイムは生き残り、とりわけドイツに流れ込んだ思想はナチズムへと収斂してゆく。ヨーロッパが本当にこのパラダイムから脱却するためには、ナチスによるユダヤ人のホロコーストを経て、その壮絶な結果に直面しなければならなかった。フロイトの精神分析理論はホームズの推理法と親和的であったと言われるが、この文脈においてはフロイトこそが変質論パラダイムに終焉をもたらした人であった。パラダイムの転換は、患者の身体を見ることから、患者の話を聞くことへという変化によってもたらされたのである。

「身体の視覚化」に加担した推理小説も、新しい時代になると新しいパラダイムを必要とするようになっていった。1920年代以降に書かれたアガサ・クリスティーの作品は、確かに新しいパラダイムによっている。そこではもはや犯罪者の身体に特別な関心は払われない。犯罪者はどこにでも潜むありふれた人となる。クリスティーの推理の醍醐味は犯人の意外性にあるが、出世作の『アクロイド殺し』(1926年)はその端的な例である。読者がかもともと信頼を寄せていた語り手その人がアクロイドを殺した犯人なのである。『オリエンタル急行殺人事件』(1934年)も然り。犯人は被害者をのぞく乗客全員だった。そこでは犯人

は、異質な病理的身体を持つ「他者」ではない。自分自身の中に潜む「他者」なのである。

—注

- (1) Charles Bernheimer, *Decadent Subjects: The Idea of Decadence in Art, Literature, Philosophy, and Culture of the Fin de Siècle in Europe* (Baltimore: The Johns Hopkins U.P., 2002), p.139.
- (2) George W. Stocking, Jr., *Victorian Anthology* (New York: Macmillan, 1987:1991), p.12.
- (3) Havelock Ellis, *Man and Woman* (London: Walter Scott, 1894:1899), p.391.
- (4) ミシェル・フーコー『監獄の誕生』田村俣訳、新潮社、1997年、p.289.
- (5) フーコーの変質論の扱い方について Daniel Pick は、あまりにも抽象化した権力行使の戦略としての役割にしか目を向けていないとして批判している。詳しくは以下を参照。Daniel Pick, *Faces of Degeneration: A European Disorder, c.1848-1918* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), pp.235-7.
- (6) 変質論を扱った最初の包括的な著作としては次を参照。J.Edward Chamberlin, eds. al., *Degeneration: the Dark Side of Progress* (New York: Columbia University Press, 1985). ここでラフターが「多くはない」と言っているのは、犯罪学の分野に限って理解されるべきであろう。以下で触れるように、文学・文化論の分野では変質・退化の研究は Pick の研究以降、一時ブームとなった。
- (7) Nicole Rafter, *Creating Born Criminals* (Urbana&Chicago: University of Illinois Press, 1997), p.6.
- (8) この中に含まれるものとして、Stephen J. Gould, *The Mismeasure of Man* (New York: Norton, 1981). (邦訳、J.ゲールド『人間の測り間違い』鈴木善次・森脇靖子訳、河出書房新社、1989年)。
- (9) 世紀末の文化現象としての変質論を扱った研究としては以下のものがある。Pick, 1989. William Greenslade, *Degeneration, Culture and the Novel* (Cambridge: Cambridge U.P., 1994). Stephen Arata, *Fictions of Loss in the Victorian Fin de Siècle* (Cambridge: Cambridge U.P., 1996). Susan J. Navarette, *The Shape of Fear: Horror and the Fin de Siècle Culture of Decadence* (Kentucky: The University Press of Kentucky, 1998). Donald J. Childs, *Modernism & Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration* (Cambridge: Cambridge U.P., 2001). Bernheimer, 2002. また推理小説、特にホームズ・シリーズとの関わりについては以下を参照。Greenslade, *op. cit.* Chap.5 Criminal degeneracy: adventures with Lombroso, pp. 88-119, Ronald R. Thomas, *Detective Fiction and the Rise of Forensic Science* (Cambridge: Cambridge U. P., 1999).
- (10) Ian R. Dowbiggin, *Inheriting Madness: Professionalization and Psychiatric Knowledge in Nineteenth-Century France* (Berkeley: University of California Press, 1991), p.120.
- (11) Pick, *op. cit.*, p.22.
- (12) フーコーは『言葉と物』(渡辺一民訳、新潮社)の中で、西洋近代において生命の本質は知覚しえない深層に宿ると認識されるに至る、認識上の革命が起こったと指摘している。モレルもビュフォンの「外部の差異は内部の差異に比べれば何ほどのものでもない。…生命あるものの内部にこそ自然の意図の秘密が宿るのである」(p.68)という言葉に再三立ち戻っている。
- (13) Pick, *op. cit.*, p.52. 都市の変質論について、パリ、ロンドンの各々は以下を参照。ルイ・シュバリエ『労働階級と危険な階級』喜安朗・相良匡俊・木下賢一訳、みすず書房、1993年。Gareth Stedman Jones, *Outcast London: A Study in the Relationship Between Classes in Victorian Society* (New York: Panteon Books, 1971:1984).
- (14) 古代の自然の中で生きていた人間ほど損なわれずに健康であり、文明が進展するにつれ、人間は本来備わっていた本能や能力を退化させ、墮落するという変質論の一変種の古代崇拜思想は、世紀末のイギリスの社会主義思想家、エドワード・カーペンターの著書の表題、*Civilisation: Its Cause and Cure* という表現によく現れている。本書は『文明、その病因と治療』とでも訳されるが、注目すべきは文明を病と捉えている点だ。これはロンブローゾの *Crime: Its Cause and Cure* (1899) のパロディであろう。これらの表現からも、文明や犯罪という社会的事象を、病に譬える比喩が当時広まっていたことが窺える。
- (15) Nancy Stepan, pp.100-102, in Chamberlin, eds.al., *op. cit.*
- (16) 以下の記述は次を参照。Robert J.C.Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race* (London:

- Routledge, 1995), pp.14-16. 宮崎かすみ「変質論とヨーロッパの内なる他者」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）』No.6, 2003, pp.120-25.
- (17) Maurice Parmelee, 'Introduction to the English Version' in Cesare Lombroso, *Crime: Its Causes and Remedies* (translated by Henry P. Horton, 1911: Montclair, 1968), p.122.
- (18) Pick, *op. cit.*, p.114.
- (19) *Ibid.*, p.126.
- (20) *Ibid.*, p.128.
- (21) Cesare Lombroso, *Criminal Man. According to the Classification of Cesare Lombroso, briefly summarized by his daughter Gina Lombroso Ferrero* (New York, 1911), pp.xiv-xv. pp.xiv-xv.
- (22) Morel, p. 71.
- (23) Havelock Ellis, *The Criminal* (London: Walter Scott, 1890), p.206.
- (24) ロンブローゾが発明したうそ発見器については以下参照。Thomas, *op. cit.*, pp.21-39.
- (25) Sir Arthur Conan Doyle, 'The Adventure of Black Peter' in *The Return of Sherlock Holmes in The Penguin Complete Sherlock Holmes* (Harmondsworth: Penguin, 1981 [1985]), p.569.
- (26) *The Hound of the Baskervilles*, in *ibid.*, p.672.
- (27) ロンブローゾの天才論については、『天才論』 (*Man of Genius* (London: Walter Scott), 1911) を参照。
- (28) *Ibid.*, p.725.
- (29) *Ibid.*, p.698.
- (30) *Ibid.*, p.706.
- (31) *Ibid.*, p.472.
- (32) Havelock Ellis, *The Criminal*, p.24.
- (33) 'The Final Problem', in Doyle, *op. cit.*, p.477.
- (34) *Ibid.*, pp.707-8.
- (35) 'The Adventure of the Illustrious Client' in Doyle, *op. cit.*, p.990.
- (36) *Ibid.*, p.998.
- (37) Henry Maudsley, *The Pathology of Mind: A Study of its Distempers, Deformities, and Disorders* (London: Macmillan, 1895), p.536, quoted by Greenslade, p.102.
- (38) Joseph Conrad, *The Secret Agent* (Harmondsworth: Penguin, 1967 [1897]), p.77.

——参考文献

- Arata, Stephen. 1996. *Fictions of Loss in the Victorian Fin de Siècle*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bernheimer, Charles. 2002. *Decadent Subjects: The Idea of Decadence in Art, Literature, Philosophy, and Culture of the Fin de Siècle in Europe*. Baltimore: The Johns Hopkins U.P.
- Chamberlin, J.Edward (eds. al.). 1985. *Degeneration: the Dark Side of Progress*. New York: Colombia University Press.
- Childs, Donald J. *Modernism & Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration*. Cambridge: Cambridge U.P.,2001.
- Conrad, Joseph. 1967 [1897]. *The Secret Agent*. Harmondsworth: Penguin.
- Dowbiggin, Ian R. 1991. *Inheriting Madness: Professionalization and Psychiatric Knowledge in Nineteenth-Century France*. Berkeley: University of California Press.
- Doyle, Sir Arthur Conan. 1985 [1981]. *The Penguin Complete Sherlock Holmes*. Harmondsworth: Penguin.
- Ellis, Havelock. 1890. *The Criminal*. London: Walter Scott.
- . 1899 [1894]. *Man and Woman*. London: Walter Scott.
- Gould, Stephen J. 1981. *The Mismeasure of Man*. New York: Norton.
- (邦訳、J.グールド『人間の測り間違い』鈴木善次・森脇靖子訳、河出書房新社、1989年)
- Greenslade, William. 1994. *Degeneration, Culture and the Novel*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hardy, Thomas. 1988[1891]. *Tess of the D'Urbervilles*. Oxford: Oxford U.P.

- Jones, Gareth Stedman. 1984 [1977]. *Outcast London: A Study in the Relationship Between Classes in Victorian Society*. New York: Panteon.
- Lombroso, Cesare. 1911. *Criminal Man. According to the Classification of Cesare Lombroso, briefly summarized by his daughter Gina Lombroso Ferrero*. New York.
- . 1911. *Man of Genius*. London: Walter Scott.
- Maudsley, Henry. 1895. *The Pathology of Mind: A Study of its Distempers, Deformities, and Disorders*. London: Macmillan.
- Morel, B.A. 1857. *Traité des dégénérescences physiques, intellectuelles et morales de l'espèce humaine*. Paris (repr. New York. 1976)
- Navarette, Susan J. 1998. *The Shape of Fear: Horror and the Fin de Siècle Culture of Decadence*. Kentucky: The University Press of Kentucky.
- Parmelee, Maurice. 1968. 'Introduction to the English Version,' in Cesare Lombroso, *Crime: Its Causes and Remedies* (translated by Henry P. Horton, 1911). Montclair.
- Pick, Daniel. 1989. *Faces of Degeneration : a European Disorder, c. 1848-1918*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rafter, Nicole. 1997. *Creating Born Criminals*. Urbana&Chicago: University of Illinois Press.
- Stocking, George W. Jr..1991 [1987]. *Victorian Anthology*. Macmillan: New York.
- Stoker, Bram. 1979[1897]. *Dracula*. Harmondsworth: Penguin.
- Thomas, Ronald R. 1999. *Detective Fiction and the Rise of Forensic Science*. Cambridge: Cambridge u. p.
- Wilde, Oscar. 1989. *Complete Works of Oscar Wilde*. New York: Harper & Row.
- Young, Robert J.C. 1995. *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race*. London: Routledge.
- シュバリエ、ルイ。1993。『労働階級と危険な階級』喜安朗・相良匡俊・木下賢一訳、みすず書房。
- フーコー、ミシェル。1997。『監獄の誕生』田村俣訳、新潮社。
- 宮崎かすみ。2003。「変質論とヨーロッパの内なる他者」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）』No.6。